

千貫おいし物語

唐丹町小白浜にかかわる、次のような話があるが全く伝えられていない。

第一話 おいし観音

千貫石堤の工事は、天和二（一六八二）年から始まったが、工事のはじめから、さまざまな難題にぶつかり、

毎年のように築きかけた土手が崩壊した。

伊達藩の普請奉行川田勘助はこれに困り果て、「災難が続くのは、堤の主の怒りに触れたからに違いない」と村の重役達に相談した。そのころ村ではどこからともなく、生贄の人柱の話が広まっていた。大事な家や田畑を守るには、人柱を立てるのはやむを得ないだろうと相談がまとまった。

人柱は、沿岸の唐丹村小白浜の「おいし」という十

九歳の娘を銭千貫にて買い求め、石の櫃（ひつぎ）に閉じこめ、せめてもの旅立ちにと二歳の赤牛もろとも百年の年季を限り、高さ十三丈の堤防の中に生きうめにしたのであった。十年の歳月を要した工事もようやく完成した。

おいしの怨霊

川田勘助は工事が遅れた責任をとって、普請奉行を辞任して仙台に帰える。川田の屋敷は仙台城下中島にあつたが、以来、毎夜「闇（くら）いぞ、闇いぞ」という娘の声に勘助は悩まされ、とうとう病気になる。死んでしまった。世間では娘と赤牛の怨霊でおそろとうわさが広がった。

川田一族は、二十一回りまで死に絶えたという。そ

しておいしにかかわり合いをもった家は、後継ぎが出来なかったり、子供が育たないなどの不幸にみまわれたという。

安永六（一七七七）年、堤が出来て九十年以上たった春の終わり頃、七日七夜降り続いた雨で、堤の土手が破れ鉄砲水が津波になって村を襲った。そのとき堤から天に達するすさまじい青光りが発するのを見た村の年寄り達は「千貫おいしの怨霊だ」といって震えあがつたという。

おいしのふるさと小白浜でも、川の水があふれたり、山津波がおこり、次々と不幸が起こったりした。里の人々は小さなお堂を建てておいしの冥福を祈った。小白浜の裏山の道を小牛を連れ、娘が「寒い、寒い」といながら山奥の方へ歩いていくのを見たという人が何人か現れ、うわさがひろまり気味悪がった。その後、里の人がかのお堂に行こうとしても、どうしても

その所に再び行くことができなかつたという。ある日のこと、突然お堂に雷が落ちて、お堂は焼けてなくなり、そのお堂のあつたところに雷神石が立ったという。

夢枕に立つ

時は至って、昭和五十年ごろ千貫石地区の婦女の間に、たびたび人柱が夢枕に立つので、おいし観音建立を発願したところ、二千余名から喜捨浄財が集まり、おいし観音を建立して、おいしの冥福と千貫石堤の永久安泰を祈願することにした。

第二話 検証

この話は事実か。この話を元に年代を調べてみる。
①この「おいし観音建立の由来」は、平成四（一九九三）年に書かれたものである。

②千貫石堤の起工は、天和

二（一六八二）年、三一八年前。竣工は、元禄四（一六九一）年、徳川五代將軍綱吉の頃、十年を要した。
③起工から三年間は、天和二年、三年、貞享元（一六八四）年（二月改元）、三一年前は、毎年土手が破れた。

④貞享元年。四代仙台藩主綱村は普請奉行に川田勘助を取り立てる。

⑤川田勘助は、推定するに貞享元年冬から八年の歳月を要して、元禄四年、前記のような当時としては巨大な千貫石堤を築きあげる。

⑥それで十九歳の小白浜出身の娘おいしが、二歳の牛と共に人柱にされたのはいつかと言うと、その後の災害の記録から見ると、元禄四（一六九一）年、三〇八年前となる。おいしの生まれは、延宝元（一六七三）年、葵丑（みずのとうし）となる。牛を共にしたのである。

次ページへ続く